

令和 4 年 5 月 25 日現在

機関番号：32696

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13934

研究課題名（和文）ディスコースの視点に基づく保護者支援アプローチの開発

研究課題名（英文）The development of an approach to helping parents from discursive perspectives

研究代表者

綾城 初穂（Ayashiro, Hatsuho）

駒沢女子大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：60755213

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：価値観が多様化する現代日本においては、社会的文脈（ディスコース）を加味した保護者支援アプローチが求められる。本研究の結果、(A) 4種類の主要な「親」ディスコースが見出され、父親に比べて母親の方がそうした「親」ディスコースによる影響を受けやすいこと、そして(B) 保護者が参照する支配的なディスコースの変化が従属的ストーリーの発見や保護者の行為主体性の回復といった形で支援に有益に資することが示唆され、(C) ディスコースの視点から保護者支援を行う上で、ナラティブ・セラピーの手法をアレンジした二円法（Two-circles method）という手法が開発された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、「親」ディスコースの様相、心理支援を通じたディスコースの変化過程、そして、ディスコースの変化を生み出す効果的な介入アプローチの開発を行った。日本の臨床心理学研究ではディスコースに基づいた体系的な研究はほとんどなされていないため、社会文化的文脈を加味した心理支援を行う上で、本研究の意義は大きいと言える。また、諸外国でもディスコースの変化を主眼に据えたカウンセリング研究はまだ歴史が浅いため、本研究課題を通して示した具体的なアプローチ方法の提案は、臨床心理学研究全体にも寄与するものと言える。

研究成果の概要（英文）：In modern-day Japan, there are diverse perspectives on parenting. When helping parents in child counseling, therefore, our socio-cultural contexts (discourses) should be taken into account. The results of the series of studies suggested that (A) four major "parental" discourses were found, mothers tended to be influenced by such "parental" discourses more than fathers, and (B) shifts in the dominant discourses that parents referred to in the counseling settings can contribute to highlighting subordinate stories and recovering parents' agencies. (C) In the end, an approach to helping parents from discursive perspectives called the Two-circles method which is based on Narrative Therapy was developed.

研究分野：臨床心理学

キーワード：保護者支援 ディスコース ポジショニング ナラティブセラピー

1. 研究開始当初の背景

子どもの心理には、認知・発達段階といった個人的資質や、家族・友人といった対人関係だけではなく、社会規範や文化的背景といった社会文化的文脈（**ディスコース**）も影響する。しかし、我が国の臨床心理学研究はそのほとんどがクライアントの精神内部（認知・無意識・自己など）を分析の焦点としている。そこで研究者は、子どもに対するセラピーの過程をディスコース分析によって検討した。その結果、ディスコースに対してセラピストが取る立ち位置（ポジショニング）が子ども自身のポジショニングを変化させ、そうしたディスコースの多様化が子どもの心理的回復につながり得ること、が示された。

しかしながら、子どもの心理支援は子どものみに行われるわけではなく、ほとんどの場合、保護者も対象となる。子どもにとって最も重要な他者である保護者との関係は、子どものディスコースの多様化及び心理的回復に影響すると考えられる。また、伝統的に良き親（特に母親）の基準を作り出してきたのは心理学であり、心理支援を行う面接室がディスコースの反映する場でもある。したがって、保護者支援をディスコースの視点から批判的に考えることは実践上も倫理的にも必要不可欠と言えるだろう。

2. 本研究の目的

そこで本研究では、保護者支援の過程をディスコースの視点から分析・モデル化し、心理支援に寄与する保護者支援アプローチの開発を目的とし、特に次の3点について研究を進めていくこととした。

保護者が参照する主要ディスコースの検討：保護者が参照し得るディスコースを網羅的に収集・分類し、その主要なものを抽出する。

ディスコースの視点に基づく保護者支援の検討：成功した保護者支援事例をディスコース分析によって検討し、保護者のディスコースの変化とそれに寄与する支援者の関わりを記述する。

心理支援に寄与する保護者支援アプローチの開発： の研究結果より、ディスコースの視点に基づく保護者支援アプローチのモデル化を行う。

3. 研究の方法

保護者が参照する主要ディスコースの検討

保護者にまつわるディスコースについては臨床心理学領域ではほとんど検討されておらず、具体的な様相が不明瞭である。そこでまず保護者が参照し得るディスコース（保護者であることを意味づける解釈レパトリー）とその影響を探索的に検討することを試みた。

調査方法：小学校から専門学校・大学院生までの子どもを持つ400名の親に対して、「理想的な親」「理想的ではない親」「それぞれを意識する時」「自分が理想的な親であるか否かの評定（11段階）」「その理由」について回答を求めた。

分析方法：ディスコースの諸相とその影響を、自由記述の内容と記述間及び自己評価との関連から分析するためミックスメソッドを採用した。具体的には、自由記述を内容から質的にカテゴリー化してまとめた上で、見出された各質的カテゴリーの結びつきを計量テキスト分析によって検討し、その結びつきからディスコースを取り出した。さらに、母親・父親間や自己評定群間での理想とする親のイメージに違いがあるかを χ^2 検定によって分析した。

ディスコースの視点に基づく保護者支援の検討

心理支援にディスコースの視点がどのように資するのかを明らかにするために、成功した保護者支援事例を対象にディスコース分析による事例研究を行い、ディスコースがどのように保護者支援に影響するのか、また、そこに支援者の働きかけがどのように影響するのかについて検討することを試みた。

調査方法：保護者による子どもに関する相談事例を分析対象とした。全て研究代表者が支援者として従事したものであり、終結後に対象者から承諾を得たうえで検討を行った。

分析方法：支援過程全体を検討するため事例研究の枠組みを採用した。データの解釈にあたっては、ディスコース分析およびポジショニング理論を理論的視座とした。具体的な分析としては、語られた内容に関する質的カテゴリー化を行って複数のディスコースとポジショニングを特定した上で、それらを支援過程に沿って時系列的に整理した後、支援者の介入による影響を考察した。

心理支援に寄与する保護者支援アプローチの開発

による知見を踏まえると、ディスコースの視点に基づく心理支援モデルとして、ナラティブ・セラピーで用いられる介入手法の組み合わせが有益であることが示唆された。しかしナラティブ・セラピーには相応のトレーニングと独特の言葉遣いが必要であるため、必ずしも利用しやすい方法とは言えない。そこで、より利用しやすい保護者支援アプローチを目指し、ナラティブ・セラピーの考え方を可視化する二円法（two-circles method）を開発し、実践を行うことを試みた。

調査方法：先行研究においてすでに開発されていた「修復会議」（ナラティブ・セラピーと修復的実践の考えをもとに作られたカンファレンス手法の一つ）の中で使われていた二つの円を描く実践（二円法：two-circles method）を、保護者支援で用いられるようアレンジした。その後、実際の保護者支援で用いて、そのアプローチの有用性を検討した。なお、二円法の開発と検討にあたっては、ナラティブ・セラピストであり修復会議を開発した John Winslade 氏（カリフォルニア州立大学サンバーナーディーノ校名誉教授）と Michel Williams 氏（元 Edge-Water College スクールカウンセラー）、ナラティブ・セラピストの国重浩一氏（ナラティブ協働実践研究センター）らに指導も仰いだ。

分析方法：ディスコース分析を理論的枠組みとしつつ、修復会議を実践した先行研究に準じて事例研究を採用し、支援過程全体を検討した。

4. 研究成果

保護者が参照し得る主要なディスコースの明確化

「親」ディスコースについて次の4つのバリエーション（図1）が見出された（(a) 子ども中心ディスコース：子どもを受容するか支配するか、(b) 親としての資質ディスコース：親に人格的資質があるか、(c) 親としての役目ディスコース：子どもを適切に養育するか、子どもとの関係はどうか、(d) 虐待ディスコース：子

どもに虐待や暴力を行うか)。また、父親は全体としてあまり「親」ディスコースを意識しない一方で、母親は「親」ディスコースに影響を受けやすいこと、ある親にとって高い自己評価の根拠となるディスコースが、他の親にとっては低い自己評価の根拠となることも指摘された。さらに、幸せの源泉として家族を中心に置く支配的ディスコースの存在も指摘された。このディスコースの検討からは、このディスコースの影響下にある人は、家族によって幸せを得ることができるとともに、家族を離れた個人的な幸せは達成しにくくなるという可能性が指摘された。

以上の研究結果からは、虐待ディスコース

を除くと、どの「親」ディスコースが望ましい/望ましくないとは言えないこと、したがって保護者がどのディスコースに否定的影響を受けているか、どのディスコースを参照することが援助に資するかといったことについては個別に検討する必要があること、そのためにディスコースの影響とその支援方法について個別の事例研究によって検討する必要があることが示唆された。

ディスコースの視点に基づく保護者支援の検討

ディスコース及びポジショニング理論の視点から保護者支援について複数の事例研究を行った結果、(a) 欠損ディスコースや家父長制ディスコースといった支配的ディスコースが保護者の語りを制約していること、(b) 精神内界を強調した見方をするとそうした制約が見えにくくなり支援が困難になり得ること、(c) 支配的ディスコースの脱構築と子ども中心主義といった新たなディスコースの参照が肯定的変化と並行していること、(d) 日常と隔絶された保護者面接という場が、オルタナティブなディスコースを参照する上で有益であること、(e) 支援者の発話が保護者の参照するディスコースと不一致な場合に支援過程に否定的な影響が起き得ること、(f) 子どもに関するディスコースの変化に伴って、子どもに対応する上で保護者の行為主体性が回復すること、(g) 効果的な実践のためには例外の探求や問題の外在化といったナラティブ・セラピーの技法が有益であること等が指摘された。

以上の結果から、保護者支援においてはディスコースの影響を保護者と支援者が共有すること、その上でナラティブ・セラピーの技法が有用となり得ることが示唆された。

心理支援に寄与する保護者支援アプローチの開発

二元法による保護者支援を検討した結果、(a) 本手法がナラティブ・セラピー的なやりとりを自然に導入できること、(b) 支配的ディスコースでは見えにくかった子どもの側面(オルタナティブ・ストーリー)を保護者が語りやすくなること、(c) 保護者以外の他者視点の導入を侵襲的ではなく行えること、(d) 子どもを尊重した解決プランが構築できることが示され、二元法がディスコースの視点から保護者支援

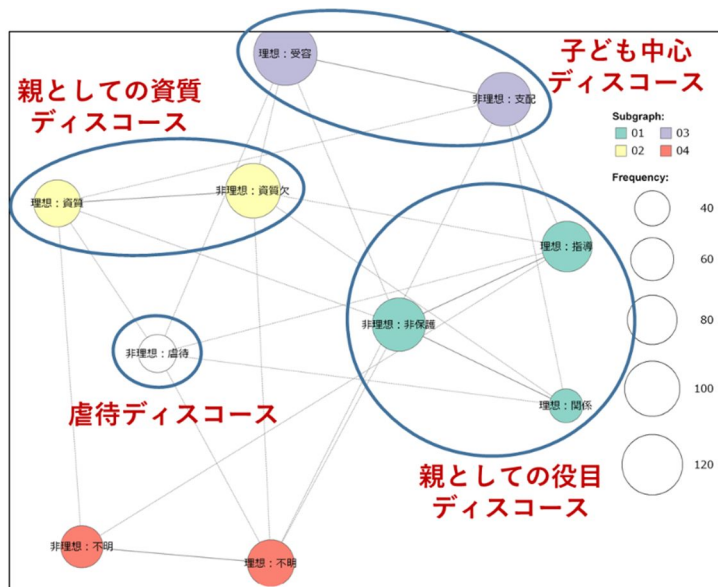


図1. 4つの「親」ディスコースの共起ネットワーク

を行う有益なアプローチとなることが示唆された。

本研究で開発された二円法の保護者支援アプローチは以下の通りである。なお、図 2 は本実践研究によって最終的に作られた二つの円とアプローチの関係を描いたものである。

傾聴：保護者に「子どもについて大変に感じていること」を話してもらう。

板書：二円法の導入を説明し、ホワイトボード左側に円を描く。

名前付け：保護者の言葉を使って左円内に で語られた問題のキーワードを記す。

影響のマッピング及び問題の外在化： の『問題』が保護者や子どもにどんな影響を及ぼしているかを保護者に尋ね、その内容を記述し、左円から線を引き。

解決の意思確認

オルタナティブ・ストーリーの発見：横造紙右側に円を描き、 と異なる子どもの側面を保護者や保護者支援参加者（教員や SC）に尋ね、右円の周りに記述する。記述から円に矢印を伸ばす。

名前付け：右円周辺の記述に表れている子どもの側面について保護者に名前を付けてもらう。

どちらの円が好きか尋ね、オルタナティブ・ストーリーに移る意思を確認する。

解決プランのブレインストーミング

プランの選定： のうち実行可能なプランを選定し、実施者を決める。

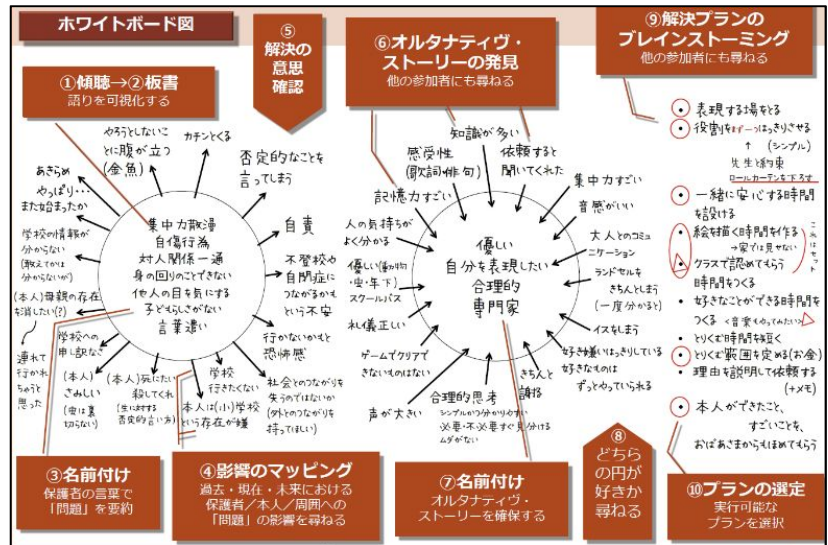


図 2. 二円法の支援過程の具体例

今後の展望

研究結果からは、二円法によるアプローチが、保護者支援に限らず、ディスコースの視点を踏まえた個人・グループでの対話において有益となり得ることがうかがえる。新型コロナウイルス感染症の拡大の影響もあり、本研究の課題期間内では二円法の実践研究事例を蓄積することは困難であったが、本アプローチを保護者支援以外にも広く活用していくことは、ディスコース的視点を心理支援に導入する上で重要となるだろう。今後は、広く実践事例や事前事後での効果測定を積み重ねて本アプローチの精緻化を行い、二円法の適用可能性と限界について明らかにする必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 綾城初穂	4. 巻 37
2. 論文標題 ディスコースの視点から見た親面接の理解と意義	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 61-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 綾城初穂	4. 巻 11
2. 論文標題 ナラティブ解釈におけるポジションという視点の意義と可能性 臨床心理学領域での活用に焦点を当てて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 N：ナラティブとケア	6. 最初と最後の頁 36-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 綾城初穂・平野真理・中坪太久郎	4. 巻 15
2. 論文標題 ナラティブからみた日本の幸福感 パークのベンタドに基づく自由記述の構造分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 駒沢学園心理相談センター 紀要	6. 最初と最後の頁 3-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 綾城初穂	4. 巻 14
2. 論文標題 ナラティブセラピーを用いた保護者支援の実践事例 人を問題にしない協働は何をもたらすのか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 N：ナラティブとケア	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 綾城初穂・平野真理
2. 発表標題 保護者をめぐる「親」ディスコースの諸相 ミックスメソッドによる臨床心理学的検討
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 綾城初穂
2. 発表標題 社会構成主義に基づく保護者支援の実践事例の検討 外在化と多声性を用いた保護者と学校との連携
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayashiro, H., Hirano, M., & Nakatsubo, T.
2. 発表標題 Contribution of "Family" to Japanese People's Concept of Happiness: Discourse Analysis of Texts about Happiness.
3. 学会等名 9th European Conference on Positive Psychology in Budapest, Hungary (ECP 2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 綾城初穂
2. 発表標題 子どもを語るディスコースはいかに変化するか ポジショニング理論に基づく保護者支援過程の検討
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北村篤司・横山克貴・綾城初穂
2. 発表標題 子どもの非行や問題行動をどのように語ることができるのか ディスコースとエイジェンシーの視点からの検討
3. 学会等名 日本質的心理学会第14回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------